6/2/2009

＊キリスト教学特殊講義＊＊＊＊ S.　Ashina

Ⅰ　「政治的なもの」とキリスト教

＜前回＞シュミット→アガンベン

11. 主権の論理構造：「法的秩序の外と内」の「同時」の逆説性。
　しかし、法という意味システムを根拠付けるものは何か？

24. Giorgio Agamben, *State of Exception*（translated by Kevin Attell）, The University of Chicago Press, 2005.　Stato di eccezione, 2003.

The essential contiguity between the state of exception and sovereignty was established by Carl Schmitt in his book *Politische Theologie*（1922）. Although his famous definition of the sovereign as "he who decides on the state of exception" has been widely commented on and discussed, there is still no theory of the state of exception in public law, and jurists and theorists of public law seem to regard the problem more as a *questio facti* than as a genuine juridical problem.（1）

The question of borders,

they find themselves in the paradoxical position of being juridical measures that cannot be understood in legal terms, and the state of exception appears as the legal form of what cannot have legal form. On the other hand, if the law employs the exception --- that is the suspension of law itself --- as its original means of referring to and encompassing life, then a theory of the state of exception is the preliminary condition for any definition of the relation that binds and, at same time, abandons the living being to law.（1）

５　ティリッヒと意味の形而上学

１．近代以降のキリスト教の思想状況
　宗教改革と啓蒙主義　→　自律(Autonomie)と他律（Heteronomie）の対立状況の克服
　　　　諸伝統の再統合　　　cf. キリスト教と異教

２．文化的な意味世界とその宗教的基盤（意味根拠）
　・意味世界の生成に対する宗教的基盤の積極的な関わり
　・成立した意味世界の自律性→相対的自律から対立へ

３．ティリッヒの思想的課題
　・宗教と文化：文化の神学
　・教会と社会：宗教社会主義論
　　↓
　理論的基盤の構築の試みと弁証神学
　　1920 年代：意味の形而上学
　　1950 年代：存在論的人間学

４．基本文献
　1919:Über die Idee einer Theologie der Kultur (MW.2)
　1923:Das System der Wissenschaften nach Gegenständen und Methoden (MW.1)
　1925:Religionsphilosophie (MW.4)
　1925-1927: Dogmatik-Vorlesung (Marburg / Dresden)

５．シュミットからアガンベンへ、主権論の展開：

政治的なものと宗教的なものとの関係が、主権者（王）とホモ・サケルの共有する例外状態として確認できること。

↓

ティリッヒの意味の形而上学の論理と宗教社会主義論

６．意味の形而上学：

知（意味行為・意味経験）の現象学的分析　→　思惟、存在、精神

Denken Sein Geist

→　諸学の体系と方法

→　神学とはいかなる仕方での学か

７．体系の二重性：諸学の体系と神学体系

シュライアマハーからトレルチに至る体系構想の共通課題

W. Pannenberg, *Wissenschaftstheorie und Theologie*, Suhrkamp, 1977.

芦名定道　『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社、1995。

「キリスト教思想と形而上学の問題」、京都大学基督教学会『基督教学研究』第 24 号、2004 年、1-23 頁。

８．ドイツ近代哲学の諸学の体系構想

原理から体系へ

・体系とは何か。体系と歴史性（生の非完結的断片性）→体系と改訂

・原理がいかに与えられるか。

カント主義と観念論／現象学／存在論

自然と歴史（文化・精神・道徳・価値）

実証主義的一元論の克服の試み

価値から意味・言語へ

９．思惟と存在という二つの基本概念を統合した精神――歴史概念とともに「生」に関連づけられ、アガンベンの「生」と同様に、政治と宗教の現実化の領域となる――が、哲学体系論の基礎をなす。この精神の特性を示すのが、「意味」。

10.「あらゆる精神的行為は、意味行為（Sinnakt）である」（Tillich,1925,133）

Jeder geistige Akt ist ein Sinnakt.

Geist / Sinnvolzug, das im Geist Gemeinte / Sinnzusammenhang

sinngebend, sinnerfüllend

die geistige Wirklichkeit / Sinnwirklichkeit

11. Sinnprinzipienlehre(Philosohpie) → Sinnelementen

12.「すべての意味意識には、三重のものが含まれる。第一は、意味連関の意識である。あらゆる個別的な意味はこの連関の内に存立し、それなしには意味を喪失するであろう。第二は、意味連関の有意味性についての意識であり、それによって個々の意味が有意味なものとして意識される。すなわち、すべての個別的な意味に現前する無制約的な意味の意識である。第三は、すべての個別的な意味がそのもとに置かれる、無制約的な意味を成就せよとの要請の意識である。」（ibid.）

In jedem Sinnbewußtsein ist ein Dreifaches enthalten: erstens das Bewußtsein des

Sinnzusammenhanges, in dem jeder einzelne Sinn steht und ohne den er sinnlos würde; zeitens das Bewußtsein um die Sinhaftigkeit des Sinnzusammenhanges und damit jedes einselnen Sinnes, d.h. das Bewußtsein um einen unbedingten Sinn, der in allem Einzelsinn gegenwärtig ist; drittens das Bewußtsein um eine Forderung, unter der jeder Einzelsinn steht, den unbedingten Sinn zu erfüllen. --- Das erste Sinnelement also ist das in jedem Sinnakt gegebene Bewußtsein um den allgemeinen Sinnzusammenhang, um die Unmöglichkeit eines geforderten Sinnes, um die Totalität, um die "Welt".

13. 20 世紀の一連の哲学的意味論：有意味性意識と意味概念の分析

意味は関係概念（体系内諸要素の相互関係）である。

・意味形式（Sinnform）：有意味性は、意味連関（全体）と個別的意味（部分）の循環構造の中における個別的意味の限定→世界意識（Weltbewußtsein）が含意

精神：思惟（主観）と存在（客観）の関係性として構成

意味：実在との連関が含意（意味に対する指示）

↓

日常的生の有意味性

有意味性を構成する形式が意味形式の事柄であり、合理性や言語、言論はこの形式性に基づいて成立する。

・意味形式を有する意味世界：恣意性（偶然的歴史的）→　世界の無根拠性

存在論的不安

生の非完結性　→　終局的な全体性（Totalität）の到達不可能性

・意味内実（Sinngehalt）：個別的意味と意味連関を包括した意味意識の根拠付けを担うもの　→　意味根拠

意味の根底(Grund)かつ深淵(Abgrund)

起源にして要請、現在と不在　　　cf. シェリング

歴史的具体化の根底（体系の歴史性、カイロス）

欲望の深淵

言語や言論のプロセスに回収することはできない。

↓

形成かつ批判

イデオロギーとユートピア

金子晴勇『ルターとドイツ神秘主義――ヨーロッパ的霊性の「根底」学説による研究』創文社、2000 年。

14. 意味根拠は意味世界から論理的に導出できないが、意味世界における経験可能性を要求する（有意味性の超合理的な根拠）。

意味根拠は、意味世界の外部であると同時に内部である。

↓

アガンベンが示した主権の論理構造

15. 神の存在論証における「第一原因」はその論理構造においてパラドックス。

16. 宗教の概念の二重性：広義と狭義

広義の宗教概念（意味根拠としての宗教・意味世界の正当化としての宗教）と狭義の宗教概念（制度化された既成宗教・常識定期意味での宗教）との区別。

「宗教は無制約的なものへの志向性であり、文化は制約的諸形式とその統一性への志向性である」（Tillich, 1925, 134）、「文化的行為において、宗教的なものは実体的であり、宗教的行為において、文化的なものは形式である」（ibid., 135）

Religion ist Richtung auf das Unbedingte, Kultur ist Richtung auf die bedingte Formen und ihre Einheit.

Im kulturellen Akt ist das Religiöse also substantiell; in religiösen Akt das Kutturelle formell.

17. 宗教は、意味根拠を具体的な象徴で表現する。

意味根拠の象徴化によるパラドックスと脱パラドックス化の試み

↓

しかしこの象徴化がその体系外部から観察されるとき、再度、パラドックスの脱パラドックス化自体が一つのパラドックスであることが顕わになり、要請はこうして要請に留まることになる。

↓

宗教的多元性は歴史の内部では克服不可能である。

終局的な完結した全体の不可能性＝外部は消去不可能

Hans-Ulrich Dallmann, Die Systemtheorie Niklas Luhmanns und ihre theologische Rezeption, Kohlhammer, 1994.

芦名定道「自然神学の新たなフロンティア――脳と心の問題領域」、京都大学基督教学会『基督教学研究』第 27 号、2007 年、1-19 頁。

18. 象徴としての主権者

「主権者は、法的秩序の外と内に同時にある」＝「意味内実の象徴は、意味世界の外と内に同時にある」

主権者あるいは象徴：合理性と超合理性、あるいは言語と欲望（生）の二つの領域にまたがり、それらの境界線であって、二つの領域を媒介している。

政治的なものの構造を「言語と欲望」の弁証法の歴史的展開において、主権と宗教的象徴、王と神は、まさに原初的な位置を占めている。

cf. カントーロヴィチ『王の二つの身体――中世政治神学研究』: 主権者（王）の「神秘的身体」と「政治的身体」という二重性（→ 主権の永続性の問題）。

19. 聖書的伝統における意味根拠の象徴＝メシア

「政治的—法的な視点からすると、メシア主義は例外状態の理論である」（アガンベン、1995、88）。

From the juridico-political perspective, messianism is therefore a theory of the state of exception --- except for the fact that in messianism there is no authority in force to proclaim the state of exception; instead, there is the Messiah to subvert its power. (Agamben, 1995, 57-58)

20. アガンベン『残りの時――パウロ講義』（上村忠男訳、岩波書店、2005 年。*Il tempo che resta. Un commento alla Lettera ai Romani*, Bollati Boringhier, 2000）における、メシアニズムや「到来する共同体」の議論、あるいは、大澤真幸『ナショナリズムの由来』（講談社、2007 年、807-828 頁）におけるメシアの問いへの言及。

21. シュミット：「いかなる宗教的・道徳的・経済的・人種的その他の対立も、それが実際上、人間を友・敵の両グループに分けてしまうほどに強力であるばあいには、政治的対立に転化してしまう」（シュミット、1922、33）→一切の人間的事柄はその可能的においては政治的。

ティリッヒ：「人間的事柄の一切はその可能性において宗教的である」。

↓

宗教と政治との関係性の根拠はどこにあるか。

狭義の宗教と狭義の政治が構成する政教分離システムの原初あるいは根底（精神の深み）

大崎節郎がバルトに関して述べた、「『根源』における一元論（Monismus in Ursprung）」

↓

自律と他律の二項対立を克服する試みを行う根拠

意味内実と意味形式の統一としての神律（Theonomie）の探求

22. 「この宗教社会主義批判を、単純に、キリスト教と社会主義の宗教社会主義的な一元化に対して、両者の二元化を原理とする立場からの批判であったとみるのは、十分に正しい考察に基づく判断であるとは言い難い。さらにまた、この宗教社会主義批判の背後にあるより根源的な二元論（Dualismus）、すなわち、神と人間との間に横たわる無限の質的差異に基づく二元論に由来するものとみるのも、適切であるとは言い難い。この『ローマ書』における二元論は、既述のところから既に十分に明瞭な通り、『根源』における一元論（Monismus in Ursprung）に基づいている。」（大崎、1987、404）

23. 「カントにおける道徳を宗教との関係において捉えるとき、見えてくることがある。それは、『理性の批判』は理性の啓蒙として『真の啓蒙』であり、『真の啓蒙』は啓蒙の完成として『真の宗教』に到るということである」（角忍「カントにおける宗教――『カント哲学と最高善』に寄せて」、『創文』No.515, 2008.12, 24 頁）。